

集団類似性の知覚が被排斥経験後の再親和に与える影響

津村 健太

1. はじめに

進化の過程において、生存や繁殖、資源の獲得など多くの点で、人は集団や他者に依存してきた。例えば、集団の成員同士で食料や資源を共有し、出産や子育てにおいて助け合ってきた。また、集団で生きることによって、食料を獲得する、捕食動物から身を守る、といった生存上の問題も解決が可能となった。このように、人は集団や他者とのつながり無くしては生きていけなかった。そのため、人は集団や他者とのつながりに対して根源的な欲求を持つ。これが所属欲求 (need to belong) である (Baumeister & Leary, 1995)。その一方で、集団や個人から無視される、あるいはのけ者にされる社会的排斥 (ostracism) を経験してしまう場面も少なくない。

本研究では、排斥経験後に社会的なつながりを再び得ること (i.e., 再親和) が困難である可能性が指摘されている社会不安 (social anxiety) の高い者において、再親和を促進させる要因を検討する。特に、再親和を求める相手の集団成員性、すなわち再親和相手がどのような集団や社会的グループに属しているのか、という点と自らや再親和相手が所属する集団の類似性の観点から検討する。

2. 問題

2.1 社会的排斥とは

社会学や政治学をはじめとする社会科学において、社会的排除 (social exclusion) という概念が 1970 年代にもたらされた。社会的排除とは、主要な社会的関係から締め出され、社会のメインストリームから弾き出されることを指す。社会学や政治学などにおいては、社会的に排除された人々の状況や、そうした人々をいかにして社会に包摂 (inclusion) していくべきか、といった点が論じられ、様々な提言がなされてきた (for reviews, see 岩田, 2008; 樋口, 2004)。

心理学の中でも、社会的排除の心理的な影響について、様々な研究がおこなわれてきた。社会的排除には様々な形態が存在しえ、拒絶 (rejection)、社会的排

除 (social exclusion)、排斥 (ostracism)、などの概念・用語を用いて研究がなされている。これらの概念・用語に対して、それぞれを心理学的、あるいは語義の上から区別しようという試みもなされている (Leary, 2001) が、これらの概念・用語は必ずしも弁別的に用いられているわけではない。その中で共通しているのは、集団あるいは個人から無視され、のけ者にされる、すなわち社会的なつながりの欠如である。この点に着目し、社会的排除における個別具体的な要素を可能な限り捨象し、社会的なつながりの欠如自体がもたらす心理的影響についての検討がなされている (for reviews, see Williams, 2007, 2009)。

先行研究に倣い、本研究でも社会的排斥 (ostracism) の語を用い、社会的なつながりの欠如自体がもたらす心理的影響に着目する。社会的排斥の影響を検討するために用いられる実験手法は、いくつかある。その中でも最もよく用いられているのが、サイバーボール (Cyberball) と呼ばれる、コンピューターを用いた課題である (Williams, Cheung, & Choi, 2000)。この課題では、参加者は3人ないし4人程度のプレーヤーによる簡単なキャッチボールゲームをパソコン上で行う (図2参照)。その際、受容条件では均等な割合で参加者にもボールが回ってくるのに対して、排斥条件では序盤に数回程度ボールが回ってきた以降はボールが全く来なくなってしまう (e.g., Williams & Jarvis, 2006)。このような、排斥のわずかな手がかりが与えられるだけでも、所属欲求が脅威にさらされ、心理的苦痛を感じる事が分かっている (for a review, see Williams, 2009)。

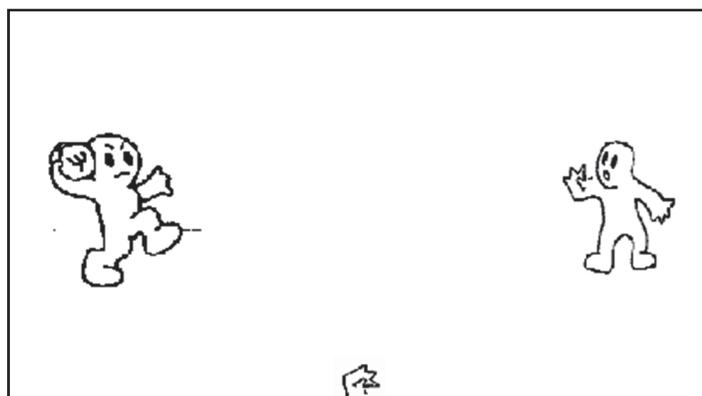


図2. サイバーボール課題のゲーム画面 (下部に表示されている手が、実験参加者)

2.2 社会的排斥経験後の再親和

先述のように、人は集団や人とのつながり無くしては生きていけない。そのため、社会的排斥は健康や心理的適応などに対する重大な危機となり (e.g., Berkman et al., 2004; Eng, Rimm, Fitzmaurice, & Kawachi, 2002)、同時に所属欲求に脅威を及ぼす。そのため被排斥者は、排斥による危機を避けるため、あるいは所属欲求を満たすために再親和を果たそうと、他者とのつながりの獲得に興味を示したり、他者に向社会的に振る舞ったりする (e.g., Jamieson, Harkins, & Williams, 2010; Maner, DeWall, Baumeister, & Schaller, 2007)。例えば、将来の排斥を予期した実験参加者は、後続の課題を受ける際に、一人で参加する課題ではなく、他者と一緒に参加する課題に取り組みたいと思う程度が高くなっていた (Maner et al., 2007)。

しかし、その一方で、社会的排斥経験後に再親和を求めるのが困難である可能性を指摘されている人々がいる。それが、社会不安を抱きやすい人 (高社会不安者) である。社会不安 (social anxiety) とは、現実または想像上の対人場面において、自身が評価される、あるいは評価されることへの予期から生じる不安である (Schlenker & Leary, 1982)。社会不安の高い者は、社会的な場面に対する不安を抱きやすいだけでなく、社会的な場面における認知や行動においても、問題を抱えやすい。例えば、社会不安の高い者は、社会的な場面における潜在的な脅威や失敗のリスクを過大視する傾向がある (Foa, Franklin, Perry, & Herbert, 1996)。そして、新しい社会的相互作用の場面でもネガティブな期待を形成しやすく (e.g., Maddux, Norton, & Leary, 1988)、相互作用を避けてしまう (Heimberg, Liebowitz, Hope, & Schneier, 1995)。これらから、高社会不安者は被排斥経験後に再親和を求めるのが困難であると予測される。実際にこれまでの研究では、社会不安の高い人においては被排斥経験後であっても再親和を求めるような反応が生じなかった (e.g., Mallott, Maner, DeWall, & Schmidt, 2009)。

これに対して、Tsumura & Murata (2015) では、社会不安の高い者が被排斥経験後にどのような相手に対してであれば再親和を求められるのか、再親和相手の集団成員性の観点から検討がなされた。集団成員性とは、個人がどのような集団・社会的カテゴリーに属しているのか、を指す。自身が所属する集団を内集団と呼ぶのに対し、所属しない集団を外集団と呼ぶ。外集団成員は、外集団

の成員であるというだけで脅威だと知覚される傾向がある (e.g., Hart et al., 2000; Olsson, Ebert, Banaji, & Phelps, 2005)。高社会不安者は社会的な場面において脅威を過度に見積もりやすく、否定的な結果を予期しやすい (Foa et al., 1996)。よって、高社会不安者は外集団の脅威を過大視してしまい、被排斥経験後に外集団成員に対して再親和を求めるのが困難であると予測される。他方で内集団成員は、外集団成員よりも社会的つながりの源泉となりやすい (Correll & Park, 2005)。また、外集団成員と比べてポジティブに評価され (Brewer & Campbell, 1976; Tajfel, 1978)、相互作用において不安を喚起しにくい (e.g., Plant & Devine, 2003; Shelton, Richeson, & Salvatore, 2005; Trail, Shelton, & West, 2009)。そのため、社会不安の高い者であっても、内集団成員に対しては被排斥経験後に再親和を求められるのではないかと考えられる。Tsumura & Murata (2015) の実験では、最小条件集団と呼ばれる、実際には存在しない実体を伴わないような集団を用いて、集団成員性が再親和行動に与える影響が検討された。その結果、低社会不安者は相手の集団成員性にかかわらず被排斥経験後に再親和を求めている。また、高社会不安者も、相手が内集団成員であれば再親和を求めているが、外集団成員に対しては再親和を求めなかった。

2.3 集団の類似性知覚と高社会不安者の再親和

Tsumura & Murata (2015) では、高社会不安者も、内集団成員に対しては再親和を求められることが示された。しかし、内集団・外集団と一口に言っても、社会的な属性や役割、地位といったものをあまり伴わないような、包括性の低い集団 (e.g., 学校のクラス) も含まれる。そのような包括性の低い社会的カテゴリーによって内集団と外集団を区別した場合には、外集団の成員であるというだけでは実質的な脅威とはならないであろう。その場合には、単に外集団成員であるという理由だけで再親和を求めなくなってしまうのは、社会的なつながりを得る機会を逸してしまっているとも言える。それでは、社会不安の高い人々も、外集団成員に対して再親和を求められるようになるには、どのような要因が必要なのであろうか。本研究ではこの点を検討するにあたり、集団類似性の知覚に着目する。

集団類似性とは、集団内の成員同士の類似性を指す。これまでの研究から、

社会的排斥経験後には集団の類似性の知覚が高まり (津村・村田, 2016)、外集団と内集団を峻別できるようになることが示されている (Sacco, Wirth, Hugenberg, Chen, & Williams, 2011)。これは、被排斥経験後に再親和を求めるにあたって、自身を受容してくれる可能性の高い相手を見極めるためだと考えられている。このように排斥を受け集団類似性の知覚が高まり外集団と内集団を峻別するようになった結果、高社会不安者は外集団をより脅威だと知覚してしまう可能性がある。そのため、外集団成員に対して再親和を求めなくなったと考えられる。

社会不安の高い人々も、常に相互作用を避けようとしているわけではなく、他者と相互作用を取りたいという欲求と相互作用に対する不安の間で葛藤を感じている (Kashdan, Elhai, & Breen, 2008)。よって、再親和における不安を取り除ければ、社会不安の高い人々も外集団成員に対して再親和を求められると考えられる。上述のように、高不安者が外集団成員に対して再親和を求めないのが、集団類似性の知覚の亢進に原因があるとするのであれば、以下のように予測ができる。すなわち、外集団の類似性を低く知覚し外集団の多様性を知覚すると、外集団に対する脅威の知覚が低減し、外集団成員に対して再親和を求める程度が高まるだろうと予測される。

2.4 本研究の目的

以上を踏まえ、本研究では集団類似性の知覚の程度を操作し、特に高社会不安者において外集団の類似性の知覚が低減する (i.e., 外集団の多様性を知覚する) ことで、外集団成員に対する再親和が促進されるのか、心理学実験を用いて検討する。具体的には、ドット数推量課題を用い集団成員性に関する教示を与え、集団の類似性知覚の操作を行う。また、サイバーボール課題によって参加者に被排斥経験をしてもらい、外集団成員あるいは内集団成員に再親和を求める程度を測定する。

3. 方法

3.1 実験参加者と実験計画

大学生 77 名 (男性 21 名、女性 56 名; 年齢 $M = 18.3$, $SD = 0.8$) が実験に参加した。実験計画は 2 (社会不安: 低群/高群) \times 2 (類似性知覚: 低類似性/高類似

性)の参加者間計画であった。社会不安については、実験の冒頭で測定した日本版他者からの否定的評価に対する社会的不安 (FNE) 尺度短縮版 (笹川他, 2004) の得点を連続変量として分析に用いた。

なお、実験参加者にはあらかじめ実験についての説明を行い、同意を得たうえで実験に参加してもらった。

3.2 手続き

実験の概要は、以下の通りである。各手続きの詳細は、後述する。

大学のパソコン教室で、一斉に実施された。参加者にはカバーストーリーとして、個人的特徴や想像力が意思決定課題の遂行に及ぼす影響に関する研究であると教示した。初めに、日本版 FNE 尺度短縮版 (笹川他, 2004) を用いて参加者の社会不安の程度を測定した。次に、架空の個人的特徴を判定するための課題として、ドット数推量課題に取り組んでももらった。この課題により、2種類ある情報処理のスタイル (アンダー・エスティメーター/オーバー・エスティメーター) のうち、いずれかに分類可能であると教示した。課題終了後、判定結果は次のゲームの後にフィードバックされると伝えた。続いて、想像力のトレーニングのゲームとして、サイバーボール課題に取り組んでももらった。ここで、参加者全員に被排斥経験を与えた。サイバーボール課題後、ドット数推量課題の判定結果として、全ての参加者に対してアンダー・エスティメーターであったと教示した。判定結果のフィードバックに続いて認知スタイルに関する説明を行ったが、その内容を変えることで、集団類似性の知覚の程度を操作した。最後に、実験の最後に行う意思決定課題は他の参加者と一緒に取り組むものであるが、アンダー・エスティメーターの人とオーバー・エスティメーターの人のどちらと一緒に課題に取り組みたいと思うか評定を求めた。オーバー・エスティメーターの人と一緒に課題に取り組みたいと思う程度を、外集団成員に対する再親和欲求の程度とした。実際にはこの意思決定課題は実施されず、デブリーフィングを行い、実験は終了した。

3.3 集団成員性の設定、および類似性の知覚の操作

最小条件集団パラダイムの一つであるドット数推量課題 (Dot Estimation

Task) (Tajfel, 1970; Tajfel, Billig, Bundy, & Flament, 1971) を援用し、社会的カテゴリーを設定した。この課題は、パソコン画面上に瞬時的 (800 ms) に表示された黒点の数を推量するもので、全 8 問が課された。参加者には画面上に表示された点の数を推量し、その回答をパソコンで入力するよう求めた。カバーストーリー上では情報処理の個人差 (認知スタイル) を測定するための課題であるとしが、「認知スタイル」は架空のものであり、実際には存在しなかった。この課題における回答の傾向から、実際の数よりも多く推測する傾向のあるオーバー・エスティメーター (Over-estimator) か、実際の数よりも少なく推測する傾向のあるアンダー・エスティメーター (Under-estimator) に分類されると伝えた。

サイバーボール課題後、実際の回答とは無関連に、ドット数推量課題の結果アンダー・エスティメーターであると判定されたと参加者に伝えた。また、課題の結果をフィードバックした次の画面では、認知スタイルに関する簡単な説明が記載されていたが、その内容によって低類似性条件と高類似性条件に分けられた。低類似性条件では、「同じ認知スタイルの人でも異なった判断や決定をする場合も多く、性格にも異なる点が見られる」という内容が記載されていた。対して、高類似性条件では、「同じ認知スタイルの人は似た判断や決定をしやすく、性格にも多くの共通点が見られる」という内容が記載されていた。これらの文章による教示に加えて、類似性に関する視覚的な手がかりも与えた。具体的には、性格特性の分布のイメージ図として、オーバー・エスティメーターの人の中で「大胆な人」がどのように分布しているのかを表すグラフを例示した。低類似性条件では分布の裾が広いグラフを呈示し、高類似性条件では分布の裾が狭いグラフを呈示した (図 3-1, 3-2)。

3.4 被排斥状況の設定

サイバーボール課題を通じて、全ての参加者に被排斥経験をしてもらった。この課題は参加者とコンピュータープログラムのプレーヤー 2 名の計 3 名で行うキャッチボールゲームで、パソコン上で行われた。参加者には、視覚的なイメージを作るトレーニングであり、相手のプレーヤーはコンピューターのプログラムであると教示した。すべての参加者に、ゲームの序盤に 2 回ボールが回

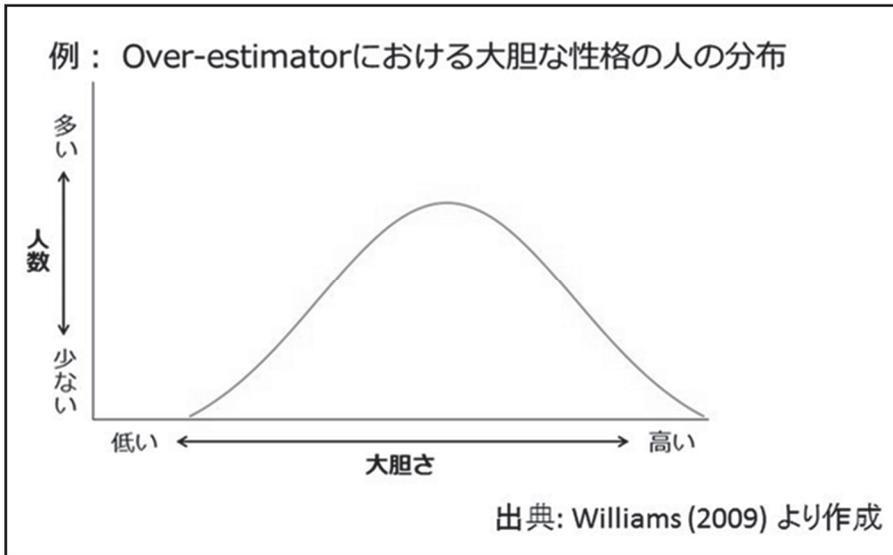


図 3-1. 低類似性条件で呈示したグラフ

註) 図中の出典はグラフの信憑性を高めるために付したもので、実在しないものである。

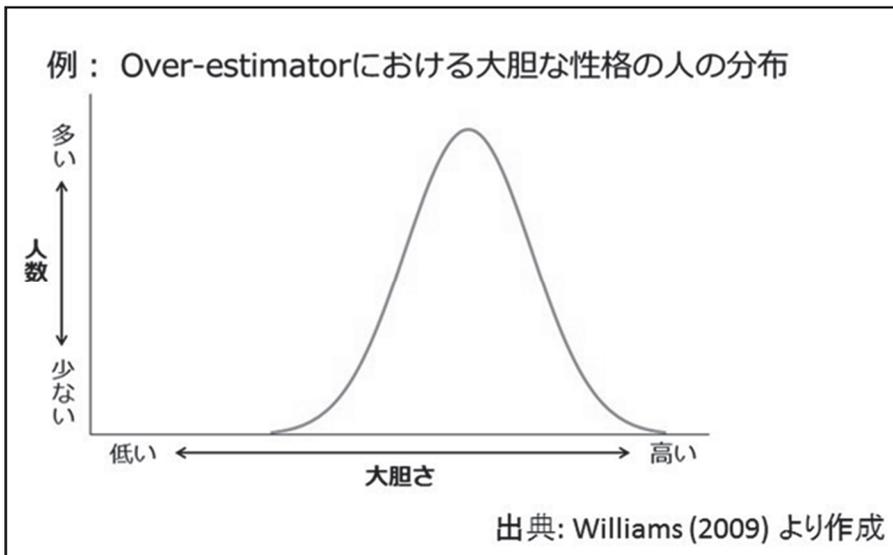


図 3-2. 高類似性条件で呈示したグラフ

註) 図中の出典はグラフの信憑性を高めるために付したもので、実在しないものである。

ってきた以降は全くボールが回ってこない、という経験を与えた。

3.5 外集団成員に対する再親和欲求の程度の測定

最後に実施する意思決定課題は他の参加者と一緒に取り組むものであるが、オーバー・エスティメーターの人とアンダー・エスティメーターの人のどちらと一緒に取り組むのかを参加者が選択することができる、と教示した。そして、課題のパートナーを決めるため、どちらの認知スタイルの人と取り組みたいと思うか「アンダー・エスティメーターの人」(1点)から「オーバー・エスティメーターの人」(6点)の6件法の両極尺度で尋ねた。この指標の値が大きいほど、外集団に対する再親和欲求の程度が高いと考えられる。なお、参加者にはこの課題の内容について詳しくは説明しなかったが、どちらの人と課題に取り組んでも課題の遂行において有利・不利は無いと伝えた。

3.6 類似性知覚の操作チェック

外集団成員に対する再親和欲求の程度の測定後、実験に関するアンケートに回答してほしいと伝え、そこで集団類似性知覚の操作チェックを行った。具体的には、「同じ認知スタイルの人同士は、全体的に似ていると思う」、「同じ認知スタイルの人は、価値観や意見が一致していると思う」の2項目に、「全くあてはまらない」(1点)から「とてもあてはまる」(7点)の7件法で評定を求めた。

4. 結果

4.1 分析対象者

実験に関するアンケートにおいて、自身の認知スタイルの判定結果を正しく答えられなかった1名の実験参加者を、分析対象者から除外した。その結果、低類似性条件の参加者は39名(男性10名、女性29名)、高類似性条件の参加者は36名(男性9名、女性27名)となった。

4.2 類似性知覚の操作チェック

類似性知覚の操作チェックに用いた2項目(5件法; $r = .66, p < .001$)を合算し、類似性知覚の指標とした。この指標を従属変数、社会不安(連続変量, $M =$

3.25, $SD = 0.90$)、類似性知覚 (低類似性条件 = 0, 高類似性条件 = 1)、およびこれらの交互作用項を独立変数とする重回帰分析を行った (表 4)。分析の結果、類似性知覚の主効果 ($\beta = .19, t(72) = 1.70, p = .093$) と社会不安の主効果 ($\beta = .07, t(72) = 0.59, p = .557$) は有意ではなかったが、交互作用が有意であった ($\beta = .24, t(72) = 2.17, p = .034$)。

交互作用が有意であったため、単純傾斜検定を行った。その結果、社会不安の高群 (+1SD) では類似性知覚の効果が有意で ($\beta = .60, t(72) = 2.71, p = .008$)、低類似性条件よりも高類似性条件の方が、類似性知覚の指標が高かった。しかし、社会不安の低群 (-1SD) では類似性知覚の条件の効果が有意ではなく ($\beta = -.06, t(72) = 0.35, p = .731$)、低類似性条件と高類似性条件の間で類似性知覚指標に有意な差は見られなかった。なお、社会不安の効果は、低類似性条件 ($\beta = -.18, t(72) = 1.17, p = .245$) と高類似性条件のいずれにおいても有意ではなかった ($\beta = .31, t(72) = 1.86, p = .067$)。

以上の結果より、社会不安の高い人においては、高類似性条件の参加者よりも低類似性条件の参加者の方が、集団の類似性知覚の程度が低かった。よって、社会不安の高い人においては、集団類似性知覚の操作は有効であったと言える。他方で社会不安の低い人では、低類似性条件と高類似性条件の間で、類似性知覚の程度に有意な差が見られなかった。この結果から、低社会不安者においては類似性の操作が有効ではなく、低類似性条件と高類似性条件の間で集団の類似性知覚の程度に差が生じなかったと考えられる。

表 4. 各条件における集団類似性知覚の程度の予測値 (カッコ内は標準誤差)

	低類似性条件	高類似性条件
社会不安低群 (-1SD)	4.12 (0.26)	4.00 (0.24)
社会不安高群 (+1SD)	3.73 (0.23)	4.70 (0.28)

4.3 外集団成員に対する再親和欲求の程度

外集団成員に対する再親和欲求の程度の指標 (6 件法) を従属変数、社会不安 (連続変数)、類似性知覚 (低類似性条件 = 0, 高類似性条件 = 1)、およびこれらの交互作用項を独立変数とする重回帰分析を行った (図 4)。分析の結果、社

社会不安の主効果 ($\beta = -.10, t(72) = 0.90, p = .371$)、類似性知覚の主効果 ($\beta = -.21, t(72) = 1.85, p = .069$)、および交互作用 ($\beta = -.13, t(72) = 1.15, p = .254$) は有意ではなかった。

交互作用は有意ではなかったものの、単純傾斜検定を行った。その結果、社会不安の高群 (+1SD) では類似性知覚の効果が有意であった ($\beta = .35, t(72) = 2.10, p = .039$) が、社会不安の低群 (-1SD) では有意ではなかった ($\beta = -.08, t(72) = 0.48, p = .630$)。社会不安の効果は、低類似性条件 ($\beta = .03, t(72) = 0.19, p = .853$) と高類似性条件 ($\beta = -.24, t(72) = 1.39, p = .170$) のいずれにおいても有意ではなかった。

以上の結果より、社会不安の高い者においては、高類似性条件よりも低類似性条件の方が、外集団成員に対して再親和を求める程度が高くなっていた。これは、本研究の仮説に沿う結果であった。他方で社会不安の低い人においては、低類似性条件と高類似性条件の間で、外集団成員に対する再親和欲求の程度に有意な差は見られなかった。

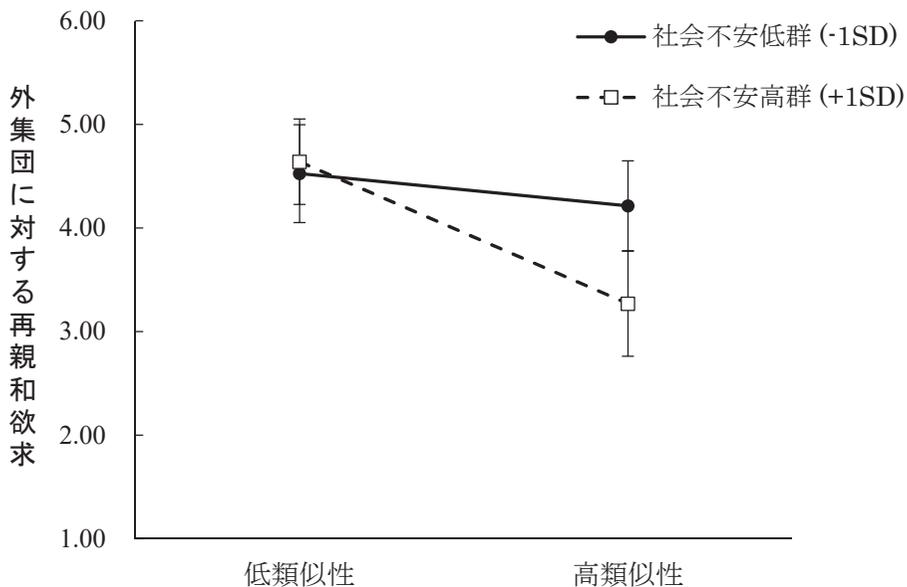


図4. 各条件における外集団に対する再親和欲求の程度の子測値 (エラーバーは標準誤差)

5. 考察

本実験の目的は、特に社会不安の高い人において、集団の類似性の知覚を低減させると外集団成員に対しても再親和を求められるようになるのか、検討することであった。

5.1 操作チェックの結果

分析の結果、社会不安高群では、高類似性条件よりも低類似性条件の方が集団の類似性を低く知覚していた。それに対して、社会不安低群では、低類似性条件と高類似性条件の間で集団の類似性知覚の程度において有意な差が認められなかった。この結果から、低社会不安者においては類似性の操作が有効ではなく、低類似性条件と高類似性条件の間で類似性知覚の程度に差が生じなかったと考えられる。社会不安の高い人の間では類似性知覚の程度に差が生じたのに対して、社会不安の低い人では実験操作が有効でなかったのはなぜなのであるだろうか。

理由の1つに考えられるのは、社会不安の高い人と比べて、社会不安の低い人においては被排斥経験後でも類似性の知覚が高まりにくい、という可能性である。本実験での操作チェック項目に対する分析では、社会不安の単純傾斜は有意ではなかったが、高類似性条件において社会不安高群よりも社会不安低群の参加者の方が、類似性知覚の程度が低い傾向が見られた。この結果は、低社会不安者は排斥されても集団を類似していると知覚していない、すなわち多様性があると知覚していることを示唆している。被排斥経験後に、集団成員性をはじめとする受容と排斥に関わる社会的カテゴリーの類似性を高く知覚するのは、再親和を得るために受容の可能性の高い他者を見極めるためであると考えられる。つまり、社会不安の低い人が排斥を経験しても集団を類似していないと知覚するのであれば、低社会不安者は被排斥経験後に受容の可能性の高い他者を見極める必要性が（高社会不安者と比較して）低い、という解釈が可能である。実際に、過去の研究においても、被排斥経験後に低社会不安者は、相手の集団成員性にかかわらず再親和を求めていた (Tsumura & Murata, 2015)。本研究や先行研究では、被排斥経験後における集団類似性知覚の変化に対する社会不安による調整効果を予測しておらず、この点については検討できていない。

低社会不安者が排斥を経験した後に、集団の類似性をどのように知覚ようになるのかについては、今後の検討課題である。また、本研究で用いた社会的カテゴリーは集団成員性のみであり、上述のような傾向も集団の類似性知覚のみに限られるのか、受容と排斥に関わる他の社会的カテゴリー（e.g., 笑顔と怒り顔）での類似性の知覚についても検討する必要があるだろう。

5.2 外集団成員に対する再親和欲求の程度

社会不安の低い人においては、低類似性条件と高類似性条件の間で、外集団成員に対する再親和欲求の程度に有意な差は見られなかった。これは、社会不安低群で類似性知覚の操作が有効ではなかったためであると考えられる。Tsumura & Murata (2015) では、社会不安の低い人は、相手が外集団の成員であっても内集団の成員であっても再親和を求めている。本研究の結果と併せて鑑みると、社会不安低群では低類似性条件と高類似性条件のいずれにおいても、外集団成員に対して再親和を求めている、と解釈できるであろう。

他方の社会不安の高い人においては、高類似性条件よりも低類似性条件の方が、外集団成員に対して再親和を求めると高くなっていた。社会不安高群の低類似性条件における再親和欲求の指標 ($M = 4.64, SE = 0.41$) は中点よりも有意に高い ($t(72) = 2.76, p = .007, r = .31$) ことから、外集団を類似していないと知覚すると被排斥経験後の再親和欲求が高まる、という仮説に沿った結果であったと言える。

5.3 実験結果のまとめと今後の展望

実験の結果、社会不安の高い参加者においては、高類似性条件よりも低類似性条件の方が、類似性知覚の指標が低く、また、外集団成員に対して再親和を求めると高かった。この結果は本研究の仮説を支持するもので、被排斥経験後に集団類似性の知覚を低減させると、外集団に対しても再親和を求められるようになることを示唆している。他方で、社会不安の低い参加者においては、類似性知覚の指標と外集団に対する再親和欲求の程度のいずれにおいても、高類似性条件と低類似性条件の間に有意な差は見られなかった。本研究や先行研究（津村・村田, 2016）の実験から示されたのは、社会不安の低い人は被排斥経

験後に、内集団に対しても外集団に対しても再親和を求める、という結果であった。本研究の目的は（特に社会不安の高い人において）どのような相手であれば再親和を求められるのか検討することであり、この目的に照らし合わせれば、社会不安の低い人々は内集団に対しても外集団に対しても再親和を求められるという結果は、本研究の目的にもとるような結果ではなく、大きな問題ではないだろう。

また、社会不安の高い人でも、内集団成員、あるいは類似性の低い外集団の成員に対しては、再親和を求めようとしていた。この研究知見はこれまでの研究で示されてこなかったものであり、意義のあるものであると考えられる。しかしその一方で、本研究には限界点も存在する。実験では、被排斥経験後に他者と共に実験課題に取り組みたいと思うか尋ねており、被排斥経験後の再親和の意図を測定した。そのため、被排斥経験後に社会不安の高い人が実際に他者と社会的なつながりを構築できるか、という点についてまでは検討できていない。社会不安の高い者は、社会的スキルの自己評価が低く（e.g., 原田・島田, 2002）、他者から否定的な印象を持たれやすい（Papsdorf & Alden, 1998）。よって、再親和を求めようとしても社会的関係をうまく構築できない、といった事態も起きかねない。この点に関しては、今後十分に検討すべき課題であろう。

謝辞

実験を実施するにあたり、原島雅之氏（愛国学園大学）に多大なるご協力を頂きました。ここに記し、改めて心より御礼申し上げます。

注

本稿は、著者の平成 28 年度一橋大学大学院社会学研究科博士論文の一部を加筆・修正したものです。

参考文献

- Baumeister, R. F., & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, 117, 497–529.
- Berkman, L. F., Melchior, M., Chastang, J. F., Niedhammer, I., Leclerc, A., & Goldberg, M. (2004).

- Social integration and mortality: A prospective study of french employees of electricity of France-Gas of France: The GAZEL cohort. *American Journal of Epidemiology*, 159, 167–174.
- Brewer, M. B., & Campbell, D. T. (1976). *Ethnocentrism and Intergroup Attitudes: East African Evidence*. New York: Wiley.
- Correll, J., & Park, B. (2005). A model of the ingroup as a social resource. *Personality and Social Psychology Review*, 9, 341–359.
- Eng, P. M., Rimm, E. B., Fitzmaurice, G., & Kawachi, I. (2002). Social ties and change in social ties in relation to subsequent total and cause-specific mortality and coronary heart disease incidence in men. *American Journal of Epidemiology*, 155, 700–709.
- Foa, E. B., Franklin, M. E., Perry, K. J., & Herbert, J. D. (1996). Cognitive Biases in Generalized Social Phobia. *Journal of Abnormal Psychology*, 105, 433–439.
- 原田朋枝・島田修 (2002). 社会的スキルの自己評価と対人不安との関連 川崎医療福祉学会誌, 12, 75-81.
- Hart, A. J., Whalen, P. J., Shin, L. M., McInerney, S. C., Fischer, H., & Rauch, S. L. (2000). Differential response in the human amygdala to racial outgroup vs ingroup face stimuli. *Neuro Report*, 11, 2351–2354.
- Heimberg, R. G., Liebowitz, M. R., Hope, D. A., & Schneier, F. R. (1995). *Social phobia: Diagnosis, assessment, and treatment*. New York: Guilford Press.
- 樋口明彦 (2004). 現代社会における社会的排除のメカニズム：積極的労働市場政策の内在的ジレンマをめぐって 社会学評論, 55, 2-18.
- 岩田正美 (2008). 社会的排除 ——参加の欠如・不確かな帰属—— 有斐閣
- Jamieson, J. P., Harkins, S. G., & Williams, K. D. (2010). Need threat can motivate performance after ostracism. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 36, 690–702.
- Kashdan, T. B., Elhai, J. D., & Breen, W. E. (2008). Social anxiety and disinhibition: An analysis of curiosity and social rank appraisals, approach-avoidance conflicts, and disruptive risk-taking behavior. *Journal of Anxiety Disorders*, 22, 925–939.
- Leary, M. R. (2001). Toward a conceptualization of interpersonal rejection. In M. R. Leary (Ed.), *Interpersonal rejection* (pp. 3–20). New York: Oxford University Press.
- Maddux, J. E., Norton, L. W., & Leary, M. R. (1988). Cognitive components of social anxiety: An investigation of the integration of self-presentation theory and self-efficacy theory. *Journal of*

Social and Clinical Psychology, 6, 180–190.

- Mallott, M. A., Maner, J. K., DeWall, C. N., & Schmidt, N. B. (2009). Compensatory deficits following rejection: The role of social anxiety in disrupting affiliative behavior. *Depression and Anxiety*, 26, 438–446.
- Maner, J. K., DeWall, C. N., Baumeister, R. F., & Schaller, M. (2007). Does social exclusion motivate interpersonal reconnection? Resolving the “porcupine problem”. *Journal of Personality and Social Psychology*, 92, 42–55.
- Olsson, A., Ebert, J. P., Banaji, M. R., & Phelps, E. A. (2005). The role of social groups in the persistence of learned fear. *Science*, 309, 785–787.
- Papsdorf, M., & Alden, L. (1998). Mediators of social rejection in social anxiety: Similarity, self-disclosure, and overt signs of anxiety. *Journal of Research in Personality*, 32, 351–369.
- Plant, E. A., & Devine, P. G. (2003). The antecedents and implications of interracial anxiety. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 29, 790–801.
- 笹川智子・金井嘉宏・村中泰子・鈴木伸一・嶋田洋徳・坂野雄二 (2004). 他者からの否定的評価に対する社会的不安測定尺度 (FNE) 短縮版作成の試み：項目反応理論による検討 行動療法研究, 30, 87–98.
- Sacco, D. F., Wirth, J. H., Hugenberg, K., Chen, Z., & Williams, K. D. (2011). The world in black and white: Ostracism enhances the categorical perception of social information. *Journal of Experimental Social Psychology*, 47, 836–842.
- Schlenker, B. R., & Leary, M. R. (1982). Social anxiety and self-presentation: A conceptualization model. *Psychological Bulletin*, 92, 641–669.
- Shelton, J. N., Richeson, J. A., & Salvatore, J. (2005). Expecting to be the target of prejudice: Implications for interethnic interactions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 31, 1189–1202.
- Tajfel, H. (1970). Experiments in intergroup discrimination. *Scientific American*, 223, 96–102.
- Tajfel, H. (1978). *Differentiation between social groups: Studies in the social psychology of intergroup relations*. New York: Academic Press.
- Tajfel, H., Billig, M. G., Bundy, R. P., & Flament, C. (1971). Social categorization and intergroup behaviour. *European Journal of Social Psychology*, 1, 149–178.
- Trail, T. E., Shelton, J. N., & West, T. V. (2009). Interracial roommate relationships: Negotiating daily

- interactions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 35, 671–684.
- Tsumura, K., & Murata, K. (2015). Effects of social anxiety and group membership of potential affiliates on social reconnection after ostracism. *Current Research in Social Psychology*, 23, 18–25.
- 津村健太・村田光二 (2016). 社会的排斥が集団成員の類似性の知覚に与える影響 社会心理学研究, 32, 1-9.
- Williams, K. D. (2007). Ostracism. *Annual Review of Psychology*, 58, 425–452.
- Williams, K. D. (2009). Ostracism: A temporal need-threat model. *Advances in Experimental Social Psychology*, 41, 275–314.
- Williams, K. D., Cheung, C. K. T., & Choi, W. (2000). Cyberostracism: Effects of being ignored over the Internet. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 748–762.
- Williams, K. D., & Jarvis, B. (2006). Cyberball: A program for use in research on interpersonal ostracism and acceptance. *Behavior Research Methods*, 38, 174–180.